

Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

災害時は拠点にもなる「地域の病院」

②5 東京警察病院 (東京都中野区)



正面玄関側からの外観。JR中野駅の再開発後にはアクセスが空便に

千代田区富士見町から移転して4月で3年が過ぎた。東京警察病院のルーツは1874年開院の警視病院。警察制度を確立した大警視・川路利良が警視庁管下の6カ所に配置した。

直接の前身・警察病院は1929年に診療を開始している。首都東京で過酷な任務に当たる警察職員と家族の健康や経済状態を考慮し、警察病院の開設が望まれていた。現在、全患者に警察関係者が占める割合は15%程度。中野区を中心にJR中央線の沿線から広く一般の患者が訪れる地域の病院として親しまれている。

経営主体は「財団法人自警会」。警視庁職員が共済で積み立てた資金で運営している法人だ。「警視庁の病院」であることに変わりはないが、経営上は「民間の病院」の位置付けだ。

現在の所在地には以前、警察大学校があった。「全国の警察にとってはふるさとのような場所」と大村忠義・経営企画課長は語る。病院周辺には早稲田・明治・平成帝京の各大学が進出予定。JR中野駅も含めて再開発が進んでいる。

敷地が広いこともあり、周辺環境との調和に気を配っている。建物の外壁面を高層部分でセット



早稲田通り側からの外観。現在はこちらから訪れることが大半



多目的室。個室に準じたつくり



エントランス。柔らかな日差しと植栽が心を和ませる



屋上庭園。患者や家族の憩いの場



ラウンジ。窓からの眺望は一見の価値がある



スタッフステーション。柱を取り払った開放的な空間

バック。ボリューム感を和らげた構成だ。

メインエントランスでは中央待合と外来待合の間に2層吹き抜け空間のホールを設けている。売店や相談室、多目的ホールも近接。多目的ホールでは患者向けのコンサートなど、地域に向けて開かれた催し物を開催している。アースカラーである茶と緑を基調とした色合いだ。

病棟では個室と4病床室を重ねて配置。病棟廊下の長さを短縮するオーバーラップ型を採用している。間口を狭くすることで看護師の動線にも配慮。4病床室も一人一人のベッドサイドに窓を設け、個

室的多病床室を実現した。

ヘリポートには22人乗りの大型ヘリが発着可能。大規模な災害が起きた際には消防との連携も視野に入れ、医療拠点となる。95年の地下鉄サリン事件では救護活動で大いに力を発揮した。災害シミュレーションにも取り組む。

救急も力を入れている分野。現救急科部長兼救急センター長の切田学氏は阪神淡路大震災や福知山線脱線事故も経験したエキスパートだ。

「地域に親しまれる病院でありたい」(同前)
新生東京警察病院の歴史は始まったばかりだ。

リハビリのための「病院らしからぬ病院」

②6 船橋市立リハビリテーション病院 (千葉県船橋市)



喫茶店では週1回クラシックを中心にしたコンサートを開いている

全国でも珍しい「公設民営」のリハビリテーション専門病院として、2008年に開院した。200床の病床数は、リハビリ病院としては全国でも最大規模。公募の結果、初台リハビリテーション病院(東京都渋谷区)などを運営する医療法人社団輝生会が指定管理者になっている。

隣接する船橋市立医療センターなど急性期病院から、回復期リハビリ治療を必要とする脳卒中患者らを受け入れている。365日体制でリハビリ医療を提供し、退院患者らを対象に外来や訪問のリハビリ診療も行っている。

森本榮・サポート部部長は「病院らしからぬ病院づくりを目指した。特にいすにはこだわり、特注した」と言う。

エントランスはホテルの雰囲気。木を使った壁や廊下は温かみを醸し出している。病院の周囲にはリハビリ用の遊歩道を設け、竹林や草花を眺めながら歩いていると心も癒やされる。

診療の特徴は、専門職間の連携で取り組むチームアプローチ。34床に対して専門職53人で一チームを編成。六つあるチームの各チームにチームマネージャー1人、サブマネージャーとして看護師、理学



病院の外周にはリハビリ用の遊歩道が設けられている



白衣はない。医師と職員は共にカラーの上着を着ている



ユニークな形状の外來待合室



まるでホテルのようなエントランス



担当職員が見繕って季節ごとに入れ替えているオブジェ



車いすを患者に合わせてセミオーダーできるショップ

療法士、作業療法士各1人、サブマネージャー補佐としてケアワーカー1人を配置し、専門職同士が効率よく働ける組織をつくっている。

スタッフの勤務時間や休日もチーム内で決め、患者には時間帯による格差のないケアや土日曜でも平日と変わらないリハビリを提供している。

職種間の壁を除くため、医師、職員とも白衣ではなく複数の色の上着から自分で選んで着、ズボンと靴は統一したものをはいている。職種は左腕のワッペンで区別。また、職種や役職、性別に関係なく、お互い「さん」呼びをしている。

リハビリの目的は「生活の再建」。同病院では、患者に食事を自力で取ることや、日中は普段着で過ごすため朝夕の着替えをしたりすることなどを促している。また、浴槽は家庭にあるものを設置し、訓練室も和室があったりキッチンやダイニングテーブルを置いたりするなど、退院後の生活に対応できるようにしている。

森本氏は「食事には力を入れており、自前で栄養士と調理師をそろえている。各病棟の食堂は温かい食事をその場で提供できるようにオープンキッチンにし、洋食と和食を選択できる」と話す。